

「生きるに値しない生」とはどんな生か

——メンバーシップの画定問題を考える——

立命館大学衣笠総合研究機構 GCOE 生存学創成拠点
ポストドクトラルフェロー
野崎泰伸

はじめに

「生きるに値しない生」が存在するのであれば、当然「生きるに値する生」も存在する。「生きるに値しない生」という概念は、裏を返せば「生きるに値する生」の生きる権利を画定するものでもある。

功利主義の主流は、「生命の質」をよりどころにしながら、「生きるに値しない生」の存在を肯定してきた。つまり、「生命の質」——意識があったり快苦が感受できたりすること——が低い生命は、「生きるに値しない生」なのである。そして、そのようなメンバーは、生きていても死んでもどちらでもよい、すなわち、生きることが権利ではない。よって、その生にかかわる周りの者の選好により、殺すことも正当化される。

本稿では、以下のような3つの立場に注目する。

- (1) すべての生は無条件に肯定される
- (2) 生のなかには肯定されるべき生と否定されるべき生がある
- (3) すべての生は無条件に否定される

多くの功利主義者は、「生命の質」をよりどころにしながら(2)を正当化する。だが、論理的には(1)～(3)の立場の違いは、「線引きの場所」をどこにするかという問題である。0か1かその中間かだけの問題なのだ。(2)を支持する者は、実はニヒリズム的な立場の(3)を拒否しながら、(1)という立場は非現実的だという理由で取らないからこそ、(2)を正当化しようとするのではないのか。この立場においては、倫理とは現実に可能なものなかから見出すべきだという、いわば隠れた主張が見えてくる。

私は、これらすべては正当化という営為によっては主張できないと考える。そのことを示すために、多少遠回りかもしれないが、私の言う「生の無条件の肯定」という概念をまずは説明するところから始めたい。

1 「生の無条件の肯定」とはどういうものか

私の言う「生の無条件の肯定」とは、単に「あるがままのあなたをそのまま受け入れる」というような、対面相手への行為や、心理的側面だけに還元されるようなものではない。標語的にいえば、次のようなものである。

「もしも正義というものがあるならば、それは「生の無条件の肯定」である。正義とは、すべての生を無条件に肯定するものでなければならない」

容易にわかるように、「生の無条件の肯定」というのは、「すべての生」を対象にしているところから、社会的なものである。「あなたが生きることを無条件に肯定する」ためには、どうしても社会的な整備も必要である。社会的な制度は言うに及ばず、社会的な価値観をも問題にしなければならない。たとえば、財がなければ生きていくことなど不可能であるし、特定の社会的集団の生を否定するような価値観の中にあっては、集団の中の当の本人は生きることを肯定されない。

そしてそれを、正義であるというところにも特徴がある。ただ、このときに正義というものがもしあれば、それは「生の無条件の肯定」にしかならない、と主張しているのであって、そもそも正義が存在するかどうかはわからない。けれどもまた、正義などないと主張しているのでもない。存在するかどうかわからない、つまり、実体としてその存在の証明ができないものとして、なおそのうえで正義が存在するというに賭けているのである。

また、正義の実行可能性などということも無意味である。じっさい、「すべての生を無条件に肯定する」というようなことは、現実的にはほとんど無理であるか、おそらくは困難を極めるであろう。それでも、もし正義というものがあるとすれば、「すべての生を無条件に肯定する」を正義である、と決めておくことに意味はある。なにか内容のあることを正義だと決めておかないことには、社会において「よい／わるい」の判断ができないからである。すなわち、現実に行き可能なものとして社会を動かそうとするとき、それがよいか悪いか判断しなければならないが、その判断の基準を定めておかなければ、そもそも判断ができないことになってしまうということだ。これでは、なにをしようが、あるいはなにをしまいが、なんでもかまわないことになってしまう。そうならないためにも、実行可能か否かにかかわらず、正義の実質的内容を決めておく必要はある。

次に、「生の無条件の肯定」が、いわゆる「生命の神聖性」や、「生命至上主義」と呼ばれるようなものと違うということを指摘しておく必要がある。たとえば、「生の無条件の肯定」は、「末期の患者をどこまでも延命すべきだ」というような主張ではない。同じく、「不死の思想の肯定」でもない。「生の無条件の肯定」は、医療資源を使えるだけ使ってでもいのちをならえらることを正当化するようなものではない。

生命の価値は、生命それ自体に内在してあるわけではない。より正確に言えば、生命という価値の中核は、生命があることによって他の価値を実現する可能性にある。たとえば、自由という価値も、その価値を享受する主体に生命が宿っていなければ、現実の社会においては意味をなさない。その意味で、生命という価値は、ほかの価値とは違った価値であるということではある。ほかのあらゆる価値の基底でありかつ、それは外在的な価値なのではないだろうか。たとえば、生命の多様性は、生命に内在する価値ではなく、単に事実である。事実として生命のありようが多様なだけであって、多様さに価値を付与することなどできない。

しかし、だからこそ、生命は大切な価値なのではないか。自由や平等は、生命の上にし

か成り立たないのであるから。そして、自由や平等は、いちど奪われても、生命がある限り奪い返す可能性はゼロではない。しかし、生命はいったん失ってしまえば、それを取り戻すことはできない。そのようなものであるからこそ、無条件に肯定されなくてはならないのではないか。

とはいえ、そのうえで、いくらでも長生きするのがよいと言っているわけでもない。そうした主張は、従来、功利主義的な観点から正当化されようとしてきた。私は、生きながらえて社会の負担になるからその生を閉じるべきだという思想の一切に反対する。そうではなくて、もう少し別の角度から、正当化とは別の方法によって立論できるのではないか。

社会が、すべての生を無条件に肯定する方向へと向かうことは、前提である。これは、社会制度や価値観など、あらゆるところにわたってそのようにあらなければならないということである。そのうえで、「自分はもう生きることをじゅうぶんに味わった」と思うなら、その生を閉じることを否定する理屈を立てるのも、困難なのではないか。周りは、「死ぬな」とは言えても、それは死ぬことを禁じることではないだろう。すなわち、周りは生きることの支援を惜しんではないが、にもかかわらず、生き続けさせる正当な理由はない、ということである。生き続けるための制度や思想を社会に根づかせるべきだということと、目の前で生を閉じようとする人に、その選択肢をとることを禁止しないということとは、論理的には矛盾しない。

ただし、この世に絶望したり、自分はダメだと思いながらの死については、話は別である。それらは基本的には、社会のせいである。絶望せざるを得ない、あるいは、自分がダメだという価値観を醸成してしまう社会に原因があると、まずは言ってしまうてよい。絶望しようが、自分がダメだと思おうが、論理的には生きていることの価値を超えないはずなのである。生きていることを否定するような価値も、逆説的だが、生きているからこそ成立するのである。つまりは、事実としての生命を肯定することがあったうえでしか、生命を否定するという論理は成り立たないことになる。ただし、そうではあっても、現実には自ら生きることに絶望し、自分が生きていることを否定してしまう人がいるのもまた事実である。このことをどう考えるか。

何かの理由で自分が生きていることをひどく否定し、自殺を考え、リストカットやオーバードーズをしてしまう人たちがいる。そのとき、一時的にはその理由づけに反対し、反対の理由づけによって生きることを肯定されてよい。たとえば、誰からも認められないという理由で自分が生きることを否定したりする者もいるだろう。そのとき、誰かがその人を具体的に認めることは、その人にとっては大きな肯定感につながるはずである。ただし、それは「人から認められる」という行為があるから、生きることを肯定してよいという、条件付きの肯定でしかない。条件付きの生の肯定は、その条件が反転したとき、生きることを否定する論理に変わってしまう。すなわち、既存の理由づけに反対し、それとは逆の価値を有する理由づけをもってきたとしても、生きることが条件付きで肯定されている土俵の上には変わりがない。人から称賛されることはときに、とてもうれしいことではある。しかし、だからといって称賛されることで生きることが肯定されるというのは、称賛がないとき、反転してそれは生きることを否定するものとなる。さらにそのうえで、生きることを無条件に肯定することと、「人から認められてうれしい」ということとは、必ずしも矛盾するわけでもない。

功利主義は、「生命の質」の序列によって、「生きるに値するかどうか」を峻別し、殺してもよいのちがあることを正当化する。それに対して、「生の無条件の肯定」は、まずは「生命の質」には社会構築的な部分があることを指摘する。つまり、意識の有無や感覚の有無は、社会環境によっても一定程度振幅をもつものであるし、なにゆえに意識や感覚が生命の価値を論じるときに特権化されるかについては、まさに社会構築的なのである。そのうえで、「殺してもよいのちなどない、けれども殺す。そのことは正当化されない」という意味において、殺すことをいわば仕方のない調停や妥協として認めざるを得ない臨界点がある。だが、それは「価値がない生命であるから殺してもよい」のではない。生命には、上に記したような基底的で一回きりの価値はある。そしてそれはどんな生命にも平等に与えられている。その意味において、生命によって価値があるとかないとかいうのは、論理的にはおかしいはずである。殺してもよいから殺すのではなく、「ただ」殺す、「単に」殺す以外の何物でもない。なるほど、トリアージのように、救助に優先順位をつけなければならぬ場面もあるだろう。しかしそれは、限られた医療資源・人的資源・生存時間を勘案したうえで、いかに救助活動を円滑に行うかの指針のはずである。救助の優先順位をつけることと、瀕死の患者の生命に価値序列をつけることとを混乱してはならない。「生の無条件の肯定」はそういうときであっても、ただ淡々と医療資源や人的資源の拡充を求めただけである。それが拡充されれば、瀕死の状態における——まだ完全には死んではいない——黒タグはもう必要ないかもしれない、私たちはそんなことを夢見ることができる。

以上が「生の無条件の肯定」の体系の概要である。その輪郭が明らかになったところで、次に、「生きるに値しない生」という概念と、生の肯定／否定をめぐる3つの立場について考察していきたい。

2 なぜ「すべての生は無条件に肯定される」と言えるのか

1の議論で明らかにはしたが、もう一度「なぜ「すべての生は無条件に肯定される」と言えるのか」という問いについて考えよう。私は「もし正義というものがあるとするれば、それは「生の無条件の肯定」である」と述べた。これは、「なぜ肯定されるのか」という問いには答えられないことを意味する。言い換えれば、私はこの問いそのものを無意味にするために、「もし…」などと述べたのである、と理解することもできる。

「なぜ肯定されるのか」については、何かの理由で基礎づけや正当化によっては答えることができない、そのように私は主張するのである。なぜなら、そのように答えることができたとして、その理由が破たんしたり反転した途端、あるいは、その理由が認められなければ、生きることが肯定されることは論理的になくなるからである。「なぜ「すべての生は無条件に肯定される」と言えるのか」という問いの前に、「生の無条件の肯定」に賭けてみるのである。だからこそ、「もし…」というような言い草をするのである。

このことは、「すべての生は無条件に肯定される」ことが正義であるということを認めない——すなわち、(2)(3)の立場にたつ——者の存在を認める。「正義であることを認めるか認めないか」という意味において、正義には臨界があることを示している。正当化という営為が不可能であれば、そうならざるを得ない。ただし、(1)を正義であると認める者と認めない者の間には、最終的には正義について共有できることはないことになる。

(2) を主張するには、生きるに値する生とそうでない生との境界を定め、それを正当化しなければならない。しかしながら、なにゆえにそのような正しい境界が存在すると言えるのか。人間／非人間という分類から、意識の有無や快苦の有無という分類に変わったとしても、「正しい境界を設けて分類する」という土俵からは抜け出てはいない。他方、多くの場合「生きるに値しない」とされ、その生を終わらせることを正当化されるような重度の知的障害者や精神障害者も、適切な支援があれば快適に生活することが可能である。そのことは、少なくはない自立生活の実践例からも明白である。確かに、彼らは自分の意思を表現できないかもしれず、ゆえに生きたいかどうかすら、支援者にも本人にもわからないかもしれない。さらに加えて、時には「死にたい」と言うことすらあり得る。そうであるとしても、周りがそのことによって彼らを生かそうが殺そうがどちらでもよい、ということはあるまい。なにゆえに、意識や快苦の有無が特権化されて、それがなければ殺してよいという論理になるのだろうか。それは、意識や快苦がじゅうぶんにある者のおごりではないだろうか。なにより、どれほど周りが負担であろうとも、「生きるに値しない」とされる人においてほしい、生きて存在してほしい、と思う気持ちはあるのではないか。だとすれば、もうすでに言葉の定義からして「生きるに値しない」ではない。負担である気持ちと、しかしながらそれでも生きていてほしいという気持ちとは両立する。なんとなれば、負担のほうは社会的に解決できる可能性すらある。

もっと根源的には、私たちは「生きるに値する」からという理由で生きているのではないだろう。どんな理由が、私たちをして「生きてよい」ものとさせているのか。私たちは、たまたまこの世に生を享け、そしてたまたま現在まで生きてきてしまっただけではないのか。その意味では、いかなる生命——人間のみならず、動物も植物も、生きとし生けるものすべて——が平等なはずである。自己意識があるから（選好形成は自己意識がないとできない）、あるいは快苦が感受できるから、「生きるに値する」というのは、傲慢なのである。確かに、自己意識があって自分でなにがしかの判断が可能であるということは、その当人にとってもよいことかもしれないし、周りの負担を減らすことかもしれない。しかし、それはそれだけのことであるはずだ。負担だから殺してよい、殺すことを正当化できる、ということにはならない。

ただ、この立場には「現実には生命の序列が決まってしまっていて、それによって世の中は回っている」という反論もなされよう。そして、その序列はどうしても意識中心主義、快苦中心主義にならざるを得ないのだと。こうした反論に、いかに答えるか。

確かに、現実にはそのような面はある。しかしながら、殺されていくいのちも、「殺されるべきだから、あるいは、殺されるのに正当性があるから」殺されてよい、というのではないはずである。それは、殺す側の都合によって殺しているとしか言えまい。しかし、現実に決まってしまっているという生命の序列には、社会構築的な面がある。もっと言えば、殺す側の都合とは、いかに生命の序列を社会的に構築していくかの過程と結論にほかならない。それはどこまでいっても、恣意的に設定されるものであり、正当であるから設定されるものではないのだ。(2) の立場を正当化しようとする者は、現実を追認しているにすぎない。

私たちは他の生命を殺さずに生きることは不可能である。他の生命を殺すのは、ほかでもない「私が生き延びるため」である。私たちは、自分の都合によって他の生命を殺して

いるにすぎない。まずはここを直視しなければならない。私が生き延びることと他の生命を殺さないことが天秤にかけられるとき、どうしてこの「私」が生き延びることを優先することを正当化できようか。そのような理屈はすべて、私の都合によるものではないのか。ここで私は、「それはいけない」と言っているのではない。また、仕方ないとして許されるべきものでもないだろう。ただ、そういうものとして殺し、また、そういうものとして私たちは生き延びてきたし、これからもそうだろうということである。これは、現状の追認では決してない。現状を許すのではなく、現状は許されないのだ。そういう現状の中を私たちは生きざるを得ないのである。そして、もしも「赦し」ということが可能であるとすれば、そのような現状の許されなさを通してでしかあり得ない、ということである。そのためには、可能な限り「私が生き延びることと他の生命を殺さないことが天秤にかけられる」という状況そのものをなくしていかなければならない。

次に(3)の主張である。意外かもしれないが、これは(2)より断然マシな主張である。「この世に生を享け、そしてたまたま現在まで生きてきてしまった」という点においていかなる生も平等であることと、(3)の主張とは論理的に矛盾しない。生きることが否定されるとすれば、すべての生が無条件に否定されなければならない。そのうえでなお、私はすべての生が無条件に「肯定」されるような道を描きたいと思う。なぜか。

そもそも、生命や生きて存ることというのは、肯定されるべき理由があるから肯定されるという類のものではない。その理由がなくなってしまうと、生きることは否定される。ゆえに、「なんらかの正当な理由があるから生きることが肯定される」という理屈では、その理由が反転したとたんに、生きることを否定する理屈になってしまうのである。

正当化という手法には限界がある。それでは、どのような理屈が「生の無条件の肯定」を主張しうることになるのか。それは、じっさいのところ可能かどうかはわからない。だから、それが可能であることに私たちは賭けてみるしかない。もしも正義というものがあるとすれば、それは「すべての生を無条件に肯定するものである」、その正義に賭けてみる、ということなのである。

これは、「生命は尊いから」とか、「生きることはかけがえのないことだから」というような理屈づけでもない。確かに、生命は尊いかもしれないし、「代わりが利かない」という意味においては、まぎれもなく誰かが生きるということは、その当人にとってはかけがえのないものである。しかし、それを理由にはできない、ということである。生命など軽いものだ、または、かけがえがないからこそ生そのものが負担である、というように反論されれば、それは信念同士の決着のつかない争いになるだろう。

私が主張したいことは、生への肯定的な意味づけではない。意味づけがどんなものであれ、そういうものとして生そのものを肯定する可能性に賭けるよりない、ということである。価値があるから生命は尊い、あるいは、生命それ自身に内在的な価値が本源的にある、というように言わなくともよい。そうした言い方では、「それはどうして？」という問いに論理的に答えることができない。だからこそ、「生そのものを肯定する可能性」は、賭けなのである。そのような可能性を、誰がどうやって正当に測ることなどできようか。

しかし、それではなぜ(3)ではなく、(1)への「賭け」なのか。(3)には、「あらゆる生命には本質的な価値などない」というニヒリズム的な背景がある。その意味では(1)もまたそうである。違うのは、その超克の方法である。生命は、殺し合ったりもするし、

絶望を感じる時もある。殺し合うな、絶望するなという「説教」を垂れるのではない。私たちは、殺し合わなくてもすむ社会や、誰かを絶望に陥れることのないような社会を、夢想することはできる。確かに、殺し合ったり、一方的に殺されたり、あるいは絶望のただなかにある者たちにとっては、そのように夢想することすら困難で、かつしんどいことでもある。だからこそ、彼らに「希望を持て」などとは絶対に言えない。

そもそも、未来が希望に値するから、未来に賭けるというものでもない。未来を信じていることができるから、信じているのではない。生きることには希望が持てるから、希望を持ち生を肯定するのではない。そのようなすべてのことは、誠実に考えるならば、端的に言ってわからないというしかない。そのようななかにあって、それでも信じ、生を肯定するのである。「生の無条件の肯定」の主張は、正当化できないという意味で、いわば宗教のようなものでもあると言ってよいだろう。

ただし、次のように考えてみることはできるのではないか。本稿を読むあなたは、いまいかなる状況下であろうと、とにかく生きており、本稿に対して賛意を示したり、批判的な意見を持ったりするだろう。そのようなあなたは、現に「生きている」ということである。さまざまな理由で死に瀕したり、また死にたいと思ったりしていても、とにかく「生きている」。仕方なくかもしれないが、とにもかくにも生きてしまっている。この事実は、私にはとても重く、また大きいものであると感じられる。なぜなら、理由のほうを変更すれば、死に瀕したり、死にたいと思う必要がなくなるかもしれないからである。理由のほうは、どれほど困難であっても、また非常に確率が低くても、変更の可能性はある。だが、いったん死んでしまえば、それを取り消すことは不可能である。これは、当事者の「死にたい気持ち」を否定するわけではない。当事者が死にたくなるのは、自分のほうを変更するほうが簡単であるからに他ならない。比喩的にいえば、自分のスイッチと社会のスイッチのどちらかを触らなければ生きていけないとき、自分のスイッチのほうを触るほうが簡単だからそのようにするにすぎないのである。社会のスイッチなど、そもそもあるかどうかすらわからない。あったことがわかったとして、どこにあるかわからないし、他にいくつかあるかもしれない。スイッチを触ったからといって、確実に当事者の抱える「理由」が消える保障はまったくない。自分ひとりですることというのは、自分を終わらせることぐらいにはない。変えやすいから、自分を変えようとするだけなのである。

ただ、これまでの歴史が示すように、苦難を耐えつつ、しかしながら生き延びてきた人たちがいる。また、苦難や困難を生きざるを得ない人たちの苦難や困難を少しでも減らそうと、努力してきた人たちがいる。「だから苦難に耐えろ」や、「そのような人たちが希望の救世主になってくれるであろう」というようなことを言いたいのでは毛頭ない。繰り返すが、希望があるから信じているのではないのだ。また、苦難に耐えるのは、自分にできることがそれぐらいしかないから、耐えているにすぎないのであって、決して耐えるべきであるから耐えているのではない。現状のただなかにあっては、耐えることぐらいしか自分には簡単にしのぐ方法がないからそうやってしのいでいるだけなのである。絶望は、希望を信じていることができないからこそ生じてくる。ただし、希望に根拠がないのと同様に、絶望にも根拠はない。過去を悔いることはあっても、それは未来への絶望を意味するものではない。逆にいえば、どんなに幸福であったとしても、それは未来への希望を意味するものではないのだ。

絶望も希望も、そのような意味において抱いたり信じたりするものであって、決して何か根拠があるからといって絶望したり希望を持ったりするものではないということである。ただ、私は少なくとも生きている間は幸せに生きたいと願い、また、私だけではないすべての生がその生きている間は幸せであれと願う。だからこそ、希望は持たねばならない。すべての生を無条件に肯定する社会こそが正義の社会なのだと、まずはあっけらかんに言うところからしかはじまらない、そのように信じるのだ。

おわりに

本稿では、私の言う「生の無条件の肯定」の内容を詳しく説明するなかで、生命に価値序列をつけたりする考えや、あるいは生きることを否定するような、いわばニヒリズム的な考えに対して、どういう立場が可能であるかを検討した。その結果、立場（１）～（３）はともに正当化不可能なこと、そして、そのなかでしかしなぜ（１）を選ぶのか、について議論した。

ただやはり、現実として希望を持ったり信じることが困難な者に対しては、こうした論は空を切るだろう。その点について今後考えていきたい。

参考文献

- Derrida, Jacques 1999 *Sur parole, instantanes philosophiques* (= 林好雄・森本和夫・本間邦雄訳, 2001 『言葉によって—哲学的スナップショット』, 筑摩書房)
- 小林 和之 2004 『「おろかももの」の正義論』, 筑摩書房
- 森岡 正博 2007 「生命学とは何か」, 『現代文明学研究』第8号, 447-486
- 野崎 泰伸 2007 「生の無条件の肯定」に関する哲学的考察—障害者の生に即して」, 大阪府立大学博士学位論文
- 立岩 真也 2008 『良い死』, 筑摩書房
- Singer, Peter 1993 *Practical Ethics, 2nd. Edition* (= 山内友三郎・塚崎智監訳, 1999 『実践の倫理 新版』, 昭和堂)